

## 平成 25 年度 学校経営計画及び学校評価

## 1 めざす学校像

- 1 文武両道をめざす高校  
高い志をもち、幅広い教養を身に付けると共に他人を思う心を育む。また、特別活動や部活動をとおして逞しい実行力、実践力を養う。
- 2 キャリアガイダンスの充実した進学校  
多様な進路に関する情報を提供することによって明確な進路目標をもたせ、その目標へ向けての学習活動によって進路希望の実現へと導く。
- 3 国際文化科と総合科学科という特色ある学科を基本とし進化を続ける高校  
専門学科の利点を生かし、時代の要請に応じた新しい取組みを進めていく。

## 2 中期的目標

- 1 確かな学力への取組み
  - (1) 専門高校としての特徴を活かした教育課程の編成と、両科の強みを相互に活かす教育活動の展開をめざす。
    - ア 授業力アップのために、授業アンケートを活用すると同時に、校内外に対して公開研究授業を行う。
    - イ 生徒の自学自習をサポートする方法を考えて、自ら学ぶ力を深めるように助力をする。自習環境を整備するとともに、自学自習の習慣の確立をめざす。
  - (2) 英語教育の充実
    - ア 「使える英語プロジェクト G3」校として、生徒の英語運用能力の向上の為に教材作りや教育課程を工夫する。
    - イ 総合科学科の生徒の英語発表能力を向上させ、世界で活躍できる科学人材作りをめざす。
    - ウ 英語検定や TOEIC などの資格試験にチャレンジする生徒を増やし、その得点を向上させる。
  - (3) 理数教育の充実
    - ア スーパーサイエンスハイスクール事業の 2 期目としての取組みを深め、科学の世界でのグローバルな人材を育成する。
    - イ 五感で体得する理科授業をめざし、多くの実験実習を取り入れると共に、それを活かす教材を開発する。
    - ウ 高大連携、大学訪問研修等を継続し、高校と大学の科学教育のスムーズな接続を行うとともに、生徒の学習意欲を高める。

※授業評価アンケートにおける、「授業理解度」を現在全学年平均で 78.2%であるのを、80%以上をめざす。アンケートは年 2 回実施して、授業改善の工夫の資料とする。

実験・実習を理科全授業の 50%以上で実施する。科学系コンテストに応募して、年間で 2 件以上の入賞をめざす。高大連携・大学訪問については、年間 30 講座を維持すると同時に、生徒の満足度 80%以上をめざす。英語については、TOEIC Bridge の平均点を、両学科とも 3 年間で 10 点向上した文化科 148 点、科学科 125 点をめざす。
- 2 進路指導の充実
  - (1) 3 年間の学習の成果とも言える、生徒一人ひとりの進路実現について、学校としての取組みを明確にしながら進める。
    - ア 進路情報の的確な提供と、進路選択のきめ細かい指導を行う。進路講話の実施等、早期からのキャリア教育の充実を図る。
    - イ 進路を獲得する学力を付ける為の、補習を計画的に実施する。

※進路講話等キャリア意識形成につながる LHR を、1・2 年次に 5 回以上開催する。センター試験の受験者を、現在 117 名のところを、150 名以上とし、900 点受験者を増加させる。国公立大学現役進学者を 25 名以上とする。
- 3 開かれた学校作り
  - (1) 学校の特色や活動について幅広く情報発信をすると共に、地域との連携を進め、「地域のセンター」としての機能を果たす。
    - ア 校務分掌としての広報部の事業として、いろいろなメディアで情報を発信する。また、学校説明会・地域に出かける出前説明会・体験入学を更に充実させる共に、開催案内を徹底し、多くの中学生に実際に体験してもらう。
    - イ 小中学生対象の科学講座・英語講座を実施して、地域の教育の中核校として認知してもらう。

※学校説明会の参加者を、生徒・保護者合わせて 1200 名以上とし、中学訪問・出前説明会の 2 回以上開催することにより、中学校の担当者・中学生・保護者たちと直接出会う機会を増やす。HP の更新を、毎週 1 回行う。「専門学科の特徴を知って入学する」生徒を 90%以上にする。
- 4 活気と規律のある学校生活
  - (1) 一人ひとりの生徒を大切にすると共に生徒全体の向上をめざす。
    - ア 個別に対応が必要な生徒への指導について、組織的な体制を整備する。
    - イ 部活動参加者の増加をめざすと同時に学校行事など特別教育活動の充実を図る。また、部活動と学習の両立ができる生徒を育成する。

※自己診断等で「部活動と学習の両立が出来ている」と答える生徒が、40%に満たないが、26 年度には 60%以上になるようにする。部活動参加率 85%をめざす。

## 【学校教育自己診断の結果と分析・学校協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [平成 年 月実施分]	学校協議会からの意見

## 3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1 確かな学力への取組み	1 授業力アップのために、授業アンケートや研究授業を行う。 2 生徒の自ら学ぶ力を高める。自習環境を整備するとともに、自学自習の習慣の確立をめざす。	ア 課題検討委員会に『授業力アップチーム』を構成し、具体的対策を検討し実施する。 イ 授業評価アンケートを年2回実施する。 ウ 研究授業及び合評会を開催し、全教員が授業の見学と合評会への参加をする。 エ 参観、公開授業を年3回以上実施する。 オ 学習時間調査を定期的に行い生徒の学習実態を把握する。 カ 家庭学習、自学自習習慣について、教務部を中心に検討する。 キ 自習環境の整備について、課題検討委員会を中心に対策を練る。	ア 生徒による授業アンケートの「理解度80%」(78.2%)、「興味関心75%」(73.0%)以上の達成。( )は24年度数値。 ウ 研究授業の開催回数と参加教員数。(全科目1回以上)教員の授業見学と合評会の参加数。(全教員1回以上) エ 公開授業・授業参観の人数合計300名以上。 カ 「予習復習をよくする」生徒の割合が50%以上。(24年度は、46.3%)	
(2) 英語教育の充実	1 英語運用能力の向上のための教材作りや教育課程の充実。 2 TOEICなどの英語資格試験にチャレンジする生徒を増やし、その得点を向上させる。 3 総合科学科の生徒の英語発表能力を向上させる。 4 総合科学科グローバルコースを設けて科学英語教育を充実させる。	ア 学校設定科目「GET」を放課後の選択科目として開講すると共に土曜日に特設クラスを開講する。 ・1・2年生全員にTOEIC Bridgeを受験させる。 ・授業を通じて、TOEIC等の対策を行い、その成績の向上を図る。 イ 英検受験を積極的にすすめ、2級合格者を増加させる。 ウ ALTとのチームティーチングにより、英語によるプレゼンテーション能力を向上させる。 エ フランスやスペインなどの海外のユネスコスクール校等と、英語やフランス語等でインターネットを通じた交流を行い、実践的英語運用能力を養う。 オ 総合科学科において、「科学英語基礎」を開講して、理科教員と協力しながら、課題研究等の発表を英語で行う力を養う。 カ 総合科学科のグローバルコース2年目を迎え、研究成果を英語で発信できる生徒の育成をめざす。	ア TOEIC Bridgeの平均点、2年国際文化科140点(24年度は133.9点)。 ・平均点、TOEIC IP 450点 TOEFL ITP 430点。 イ 英検の受験者(150名)と2級合格者数(70名)。 エ インターネットを通じた交流を年4回以上。 オ 課題研究の発表において英語を使用する。 カ グローバルコースの生徒は課題研究の発表要旨を英文で作成し、英語でのポスター発表を行う。	
(3) 理数教育の充実	1 理科で多くの実験実習を取り入れると共に、それを活かす教材を開発。 2 高大連携、大学訪問研修を実施し、学習意欲を高める。	ア 理数理科での実験実習の実施率を維持するとともに、より効果的な新しい実験に取り組む。 イ 高大連携講座や大学訪問研修を発展的に継続し、講座の参加人数を増加させるとともに、訪問する研究室数も昨年並みとする。 ウ 課題研究を深めて、科学系コンテストの応募や学会での発表件数を増加させるとともに、コンテストでの入賞をめざす。 エ 課題研究の成果を生かして、国公立大学のAO入試や公募推薦での合格をめざす。	ア 実験の実施率は30～50%、新しい実験を各科目2テーマ。 イ 高大連携講座の参加者を延べ150人以上、大学訪問研修を30研究室以上とする。 ウ コンテストや学会発表を5テーマ以上、2件以上の入賞をめざす。 エ 国公立大学のAO・公募推薦の合格者3名以上とする。	
2 進路指導の充実	1 適切な進路選択のための情報提供や支援。キャリア教育の充実。 2 進路実現のための学習意欲の向上と継続に対する支援。	ア 進路HRで進路選択に関わる情報提供(学部別ガイダンス、予備校の講師による進学講話等)を行う。 イ オープンキャンパスへの積極的な参加の奨励。 ウ 校内実施の外部模試受験による、学力状況の共有と学習目標設定への活用。 エ 長期休業中の希望講習の実施。 オ 高い目標を持ち、進路実現に向けて挑戦する態度を養う。	ア 進路講話(各学年3回以上)保護者向け講演会(各学年1回以上)の実施。 イ オープンキャンパスへの参加者数。 ウ 校内模試(1年1回以上、2年2回、3年5回)の実施。 オ センター試験出願者135名、国公立大学合格者20名、関関同立100名。	
3 開かれた学校作り	1 広報部を中心に情報発信、説明会の充実。 2 小中学生対象の科学講座・英語講座を実施。科学の分野でも地域をさらに深め、小中学生や住民対象の科学教室を開催する。	ア 学校説明会を3回実施する。また、体験授業やクラブ体験など、さまざまな方法で学校を体験してもらう機会を提供する。 イ HPの更新や、ソーシャル・ネットワーキング・サービスの発信による情報提供のスピードを早める。 ウ 月刊学校新聞およびメールマガジンを発行し、保護者への学校行事活動の周知を行う。 エ 中学校および進学塾を訪問し、きめ細やかな広報活動を実施、充実させる。 オ 小中学生対象の科学教室を定期的・継続的に実施する。夏期休暇中に自由研究の指導なども行う。 カ 地域住民対象に、自然観察講座や実験講座を開催する。	ア 学校説明会の参加人数1000人以上。個別応接説明会開催及び参加回数10回 イ HPを毎週、ソーシャル・ネットワーキング・サービスを隔週で更新。 ウ 新聞「月泉」を毎月発行、メールマガジンを700名、50回以上配信。 エ 中学訪問2回、80校実施。進学塾30校。 オ 小学生対象の科学教室は5回連続の基礎講座に加えて、2分野で発展講座を開催。 カ 地域住民向けの講座を3回以上開催。	
4 活気と規律のある学校生活	1 個別に対応が必要な生徒への組織的な体制整備。 2 学習の充実。部活動の充実と特別教育活動の充実。	ア 特別支援体制を組織化し、支援を必要とする生徒に対しての包括的な支援体制を充実させる。 イ 相談室機能を充実させ、課題や悩みを抱える生徒を発見する体制づくりを行う。 ウ 教員のカウンセリング能力を向上させる。 エ 遅刻を減少させ、生活規律を向上させる。 オ 部活動の活性化の工夫 カ 部活動者の、学習意欲向上に向けて、原因の究明とサポート体制づくりを行う。	ア 支援会議の月例開催。 イ 相談室の整備。 ウ 教員対象の研修会の実施。 エ 遅刻数の減少(5%減)(昨年2932名) オ 部活動参加率80%以上。クラブ体験会参加者100名以上。 カ 自宅学習平日50分以上。休日70分以上。 ・「部活動と学習の両立」の肯定率を50%以上。	